



南高不惑

■ Stay hungry, Stay foolish

校長 矢橋佳之

この言葉は、アップル社創業者のひとりスティーブ・ジョブズがスタンフォード大学の卒業式でのスピーチで言った言葉です。

幕末の思想家・教育者の吉田松陰も「諸君、狂いたまえ」と言っていたのだそうです。

ジョブズのスピーチでは3つのことが話されます。

I 点と点をつなげる

育ての親は蓄えを切り崩してジョブズを大学に進学させますが、その価値を見出すことができず、退学を決意します。それでも興味のある講義に潜り込み、カリグラフィー（文字を美しく見せるための手法）を学びます。

それが何かの役に立つとは思っていなかったものの、マッキントッシュを設計したときにその手法を用いて、美しいフォントを持つ最初のコンピュータを誕生させることができました。

II 愛と敗北

ジョブズは自ら創業したアップル社から解雇されます。しかし、情熱は消えることなくピクサー社を立ち上げ、CGを使ったアニメーション「トイ・ストーリー」で成功をおさめ、アップル社に買収されたことで戻ることができました。また、最愛の妻と出会うこともできました。ジョブズは、解雇されたというつらい経験が自分の人生には必要だったと振り返っています。

III 死

17歳のときに「毎日をそれが人生最後の一日だと思って生きれば、その通りになる」という言葉と出会い、それから毎朝「もし今日が最後の日だとしても、今からやろうとしていたことをするだろうか」と問いかけています。

これらを受けて、「全地球カタログ」という

本の最終版の背表紙に書かれていた言葉

「Stay hungry, Stay foolish」を紹介しています。

現在、3年生のみの本校にとって、2学期は実質的にほぼ最後の学期となり、「仕上げ」の学期です。

ジョブズはスピーチの中で、仕事について次のように語っています。

皆さんも大好きなことを見つけてください。仕事でも恋愛でも同じです。仕事は人生の一大事です。やりがいを感じることができるただ一つの方法は、すばらしい仕事だと心底思えることをやることです。そして偉大なことをやり抜くただ一つの道は、仕事を愛することです。

好きなことがまだ見つからないなら探し続けてください。決して立ち止まってははいけません。本当にやりたいことが見つかったときには、不思議と自分でもすぐにわかるはずです。すばらしい夫婦の関係と同じように年数がたつと少しずつ良くなっていくものです。

だから探し続けてください。絶対に、立ち止まらないで。

私なりの「Stay hungry, Stay foolish」の解釈は、「今に満足するな。失敗を恐れず、夢中になれ！」です。

夢中になるほど好きなことを仕事にできる幸運な人は多くはないかもしれませんが、そこまで夢中になって打ち込むことができたという“経験”は、ジョブズの言う“点”となります。どんな経験も人生において、ムダにはなりません。

人は転んで歩き方を学ぶものです。転ぶと痛いからと立つこともしなければ、痛みを感じずに済みますが、永遠に歩くことはできません。失敗は成功のためのプロセスなのです。

4か月間の“仕上げの2学期”で、少しでも夢中になれる経験をすることで、さらに成長して欲しいと願っています。

最後の南高祭を最高の南高祭に！ ～燃え上がってハイになれ！～



7/16に第49
回南高祭を行
いました。

本校と同じく今年度限りで閉校になる青森県立金木高校の生徒 17 名も参加し、メリークラウンさん、今売り出し中のダンスボーカルユニット ambitious さんも来られ、最高の学校祭になりました。

10 月には本校生が金木高校の学校祭に訪問する予定です。

緊張したけどがんばった！ ～販売体験実習～

8/24 はホテルポールスターでのなんぼろ物産展で販売体験実習を行いました。

前日、一所懸命やって失敗したのならば、大丈夫。失敗することでわかることはいっぱいある。堂々と失敗しておいでと激励していましたが、バツグンの連携でがんばってくれました。

担当の方からアルバイトで雇いたいくらいだったとの声もいただきましたようです。



見ず知らずの人の前で呼びかけをするなど、緊張したことと思います。その分、一回り成長して帰ってきました。

私の一冊

Vol.2.2 教諭
大澤 信 哉

今年度の「私の一冊」は本校図書室蔵書の中からおすすめの本を紹介します。

堀内都喜子著「フィンランド 幸せのメソッド」

今年の5月、フィンランドからサンナ・マリン首相が来日しました。彼女は2019年に、世界最年少である34歳でフィンランドの首相に就きました。

マリン氏は今年、ロシアによるウクライナ侵攻という国家の危機にあって、NATO（北大西洋条約機構）加盟という歴史的な政策を大統領とともに実現しようとしています。

日本でフィンランドを最初に有名にしたのは教育世界一の評価です。2001～2006年のPISA（学習到達度調査）で各分野1位、2位を獲得。日本の評価が低かったこともあり、国内でショックが広がりました。

しかし、教育以上に目を向けたいのは、フィンランドは2018年から5年連続で「世界幸福度ランキング」1位、「SDGs達成度」2年連続1位、「ジェンダーギャップ指数」（各国の男女格差を数値化したもの）2021年2位という評価です。（日本は「幸福度」56位、「SDGs」19位、「ジェンダーギャップ」116位）

フィンランドは長年「人こそ最大の資源」として、性別に関係なく若者を責任ある立場に抜擢し、ベテランがそれを支える文化を培ってきました。本書には、現在に至るフィンランドのすべての国民が平等で幸せに暮らすための社会の秘密が書かれています。

さて、フィンランドの人口は約550万人と聞いて、何かお気づきではありませんか？

そうです。北海道の人口とほぼ同じです！（約540万人）しかも、北海道はフィンランドと同様にロシアと国境を接しています。

女性の若いリーダーを生み出す社会は一朝一夕には作れませんが、まずは足下の北海道から変えていこうと思わせてくれる、これから日本が目指すべき教科書のような本です！